番組：「こころの時代　生きる力を育てる」を見て

当 HP の「『何のために学校が存在するのか？』の問いに、ドギマギ」を目にしたある若者から、「教育活動とは、生きるエネルギーを支援することとあるが、結局、生きる力とはどういうことか？」とのメール。

自分としては、「雑学 BN」の「書籍等読後感関係（Ⅲ）」P の 2006.03.17.「書籍：子どもの『心の病』を知る：を読んで」で触れているが、著者のいう「生きることを楽しめる力、大切な存在を信じ愛する力、自分自身を大切にする力、といった生きることの根本を支える力を身につけること」と、同質的なことを考えている。

そうした矢先、この著者（Dr）が「こころの時代　生きる力を育てる」と題する TV のインタビュー番組に出ていたので、更にヒントをいただけるかなと番組を見た。

Dr は、精神科医として医療少年院で「こころの病」のある少年たちと１０数年係わり合っているが、インタビュアーの問いに、少年たちの「ここの病」の最大の要因は、「親子関係のつまづきから」と答えていた。

事例として、太ももにナイフを刺さす等の義父の虐待を母親はただ見ているだけであったことが、義父の怖さ以上に母親が自分を見捨てたことがショックであったと、小学４年生頃のことを語る少年に触れていた。

Dr が説く意味するところは、周りに自分を見てもらいたい、向いてもらいたい、認めてもらいたい、受け止めてもらいたい等の叫び（愛されたい）が届かずに育ち、自分の気持ちを自分の言葉にできる力が乏しく、精神的バランスのためについ行動として表出することが、反社会的な行動（非行）となってしまっているのでないかという。

それ故、少年たち自身の育ち直しと共に、彼らを愛する大人の存在が更生への大事な条件という。最たる適任者は、親という大人であることは云うまでもなく、親自身が変わると少年たちの更生も早いと説いている。

では一般的に、親子関係の中でこうした力はどうすれば育まれるかということにあるが、先に紹介した「子育て　パッピーアドバアイス（「雑学 BN」の書籍等読後感関係（Ⅲ）P、2006.03.04.：参照）」や、「書籍：『子育て　ハッピーアドバイス　②』を目にして」：参照）」で触れている通りです。

次のような先人の言葉を思い出す。

「人を愛するとはどういうことかは、大人が子どもに言葉では唯一教えられないことであり、子どもは愛されてこそ解ることである。」

（2006 年 4 月 18 日　記）